

教職員の皆様からしばしば持ち込まれるご相談として「この学生はウソをつくんです」というものがあります。ということは、その「ウソ」は教職員にバレてしまっているということですね。果たしてそれは本当に「ウソ」と呼べるものなののでしょうか。というのも、先生の傾向を見切とうまくごまかすというのは、きわめて適応的なツツウの学生の姿であり、その多くはバレないからです。

状況説明がうまくないパターン

発達障害を抱えた学生は(その場にいなかった)相手にもわかるように状況説明をすることが難しいことがあります。いわゆる 5W1H や主語と述語を省略してしまったり、大事な前提を言わないまま妙に細かい部分ばかり詳しく話してしまったりします。また、誰が何を言ったという記憶が曖昧になりやすいという傾向が手伝っていることもあります。すると、いざ事実がわかったときに、聞いていた側としては「全然、話と違うじゃん!」という印象を抱くことになり、これが「ウソ」と解釈されるわけです。しかし、ここに述べたとおり、それは「ウソ」というよりは状況説明の困難であり、学生にウソをつく意図はなかったということもしばしばです。



かつてうまくいったやり方というパターン

あるいは発達障害を抱えた学生は、相手が何を求めているのか文脈から推し量ることが苦手なことが多いです。たとえば、小中学生のときに「はい、がんばります!」と元気よく返事をしたり、「すみません、気を付けます」と素直に謝ったりすると許されることを学習したとします。すると、大学生になって、具体的な成果物で厳密に評価される状況になっても、同じように対応するかもしれません。そしてこれを教職員側から見ると、「やると言ったのにやっていない。ウソをついた」とか、「その場だけ都合のいい返事をしてごまかそうとしている」などと映るようになるわけです。この場合も、学生側にウソをついたりごまかしたりする意図はなく、それしかやり方を知らないということがあります。



以上のように、学生の言動に明らかな矛盾が見られる場合、「ウソ」というよりも障害特性の現われではないかと考えてみると、それを学生との対話のきっかけにできるかもしれません。